

すがるなく秋の萩原あさたちて旅行人をいつとかまたん

此すがるをば、無名抄、綺語抄、奥儀抄、童蒙抄等に、みな鹿を云といへり、或はわかきしかともいへり、たしかなる證文は見えねども、かやうに申傳へつれば、和歌の事はさてこそは侍れ、其中奥儀抄には、さそりと云虫をもうすがると云、略下

〔圓珠庵雜記〕まかは、ま、ともかせぎともいへり、しかかせぎ、ともに日本紀にみえたれど、歌にはまかとのみよめり、すがるはさそりといふ蜂なるを、誤りて鹿とおもへり、日本紀第十四にみえたり、

〔玉勝間 十四〕鹿をかせぎといふ事

鹿をかせぎといふを、古の名と思ふめれど、此名すべて古書に見えたることなし、たしかならぬ名なり、おもふに和名抄の僧坊具の中に、鹿杖といふ物をあげて、加勢カセ都ツ惠エとするせるはいかならむ、

〔倭訓栞前編 六〕かせぎ 日本紀に鹿をよめり、角の體持に似たるよりの名也といへれど、鹿柵カセキを直に其物に呼たるなるべし、略中 伊豆風土記に、鹿柵の射手といふ事見えたり、しかふせぎの訓なるべし、

〔玉葉和歌集雜 十六〕寂然大原に住侍けるに、高野より山ふかみといふ事を上におきて、十首歌よみてつかはしげる中に、

西行法師

山ふかみなる、かせぎのけちかさに世にとほざかるほどぞまらる、

〔比古婆衣 七〕鹿をすがるといふ由は、顯昭法橋の袖中抄するの條に、略中 見えたるぞはじめなる、さ

て鹿をすがるといふよしは、鹿はあるがなかに、長高く瘦弱たるが立てるさまの、腰のことに細